

# 農業の新しい技術

No. 736(令和3年(2021年)6月)

分類コード 01-08

熊本県農林水産部

## 水色・滋味が優れ高収量な茶新品種候補 「熊育IN15号」

農業研究センター 茶業研究所  
担当者：山内 崇

### 研究のねらい

全国的な茶価の低迷が続く中、稼げる茶づくりに対応した「くまもと茶ブランド」を確立するために、全国的に希少な蒸し製玉緑茶の高品質化を推進するとともに、競合他県と差別化できる県オリジナル品種の開発が必要となっている。そこで荒茶品質が優れる蒸し製玉緑茶向け県オリジナル品種を育成する。

### 研究の成果

#### 〈来歴〉

「熊育IN15号」は、平成15年(2003年)から平成17年(2005年)に県内の現地茶園から採取した在来系統のうち、天草市の茶園から採取後に品種候補として選抜した。

#### 〈特徴〉

1. 「やぶきた」と比較して、一番茶の萌芽期は2日、摘採期は1日遅い(表1)。
2. 「やぶきた」よりも芽数が少なく、百芽重が大きい芽重型であり、摘採収量は「やぶきた」や「さえみどり」よりも多い(表2)。
3. 上位第2葉及び第3葉の葉緑素値は、他の主要品種と比べて高く、葉色は濃緑である(表2、図1、図2)。
4. 荒茶の外観は他の主要品種と同等かやや劣るが、内質は主要品種間で最も優れる「さえみどり」とほぼ同等であり、特に水色や滋味が「やぶきた」よりも優れる(表3)。
5. 荒茶中のテアニン及びグルタミン酸の含有量は、「やぶきた」よりも多い(表3)。

### 普及上の留意点

1. 農業研究センター茶業研究所(上益城郡御船町、標高約100m、窒素施肥量56kg/10a/年)における直近3カ年(定植後13~15年目、全て同一年に定植)の試験結果である。
2. 高品質な蒸し製玉緑茶の生産に取り組む県内全域の茶園において、新植または「やぶきた」からの改植に有望な品種として普及を図る。
3. 摘採及び整枝回数が少ない茶園では一番茶が芽数不足となるおそれがあるため、夏秋期の整枝を徹底し、適正芽数を確保する。

表1 「熊育IN15号」の萌芽期及び摘採期

品種系統名	萌芽期		摘採期	
	[月.日]	比	[月.日]	比
熊育IN15号	4.2	(+2)	4.30	(+1)
やぶきた	3.31	(0)	4.29	(0)
さえみどり	3.27	(-4)	4.26	(-3)
おくみどり	4.7	(+7)	5.8	(+9)

注1) 平成30年(2018年)から令和2年(2020年)における一番茶の平均。  
 2) 比はやぶきたを基準日とし、早い場合は(-)、遅い場合は(+)で表記。

表2 「熊育IN15号」の収量性及び葉緑素値

品種系統名	摘採収量		芽数 [本/m <sup>2</sup> ]	百芽重 [g]	葉緑素値	
	[kg/10a]	指数			上位第2葉	上位第3葉
熊育IN15号	647	(130)	1,488	80.5	54.7	60.9
やぶきた	496	(100)	1,940	56.2	48.8	56.4
さえみどり	504	(102)	1,665	48.1	51.1	53.2
おくみどり	688	(152)	2,340	62.9	50.3	57.3

注1) 黒色の遮光資材で被覆栽培を行った一番茶の調査結果。  
 2) 指数は、平均値のやぶきたを100とした場合の値。  
 3) 摘採収量、芽数、百芽重は、平成30年(2018年)から令和2年(2020年)の平均。葉緑素値は令和2年(2020年)に葉緑素計 (SPAD-502) で測定 (15芽×2反復)。



図1 「熊育IN15号」 (摘採期)



やぶきた 熊育IN15号

図2 一番茶の葉色 (上位第3葉)

表3 「熊育IN15号」の荒茶品質及び遊離アミノ酸含有量

品種系統名	荒茶品質 (蒸し製玉緑茶、官能審査) [点]								遊離アミノ酸 [mg/100g]	
	外観			内質				合計	[mg/100g]	
	形状	色沢	計	香気	水色	滋味	計		テアニン	グルタミン酸
熊育IN15号	8.0	8.5	16.5	9.8	10.0	9.5	29.3	45.8	2,000	310
やぶきた	8.5	9.0	17.5	9.5	7.5	8.0	25.0	42.5	1,200	235
さえみどり	10.0	8.5	18.5	9.5	10.0	10.0	29.5	48.0	-	-
おくみどり	7.5	8.5	16.0	8.0	7.5	8.0	23.5	39.5	-	-

注1) 荒茶品質は、平成30年(2018年)から令和2年(2020年)に行った一番茶 (荒茶) の官能審査 (6~7名による合議制、各項目10点、計50点満点) の平均値。  
 2) 遊離アミノ酸含有量は、平成30年(2018年)と令和元年(2019年)の一番茶について、高速液体クロマトグラフィー法により定量した値の平均値。「-」はデータなし。